

第154回 『ピラノア錠・OD錠の有用性について』

大鵬薬品工業株式会社 岡崎様

参加者:加藤、佐野、番場、岡田、大塚、青木

高齢者では、加齢に伴う薬物動態・反応性・多剤併用による相互作用の問題が生じやすい。抗コリン作用を有する薬物(抗うつ薬・向精神薬・パーキンソン・抗不整脈・骨格筋弛緩薬・過活動膀胱薬・H1.2ブロッカーなど)は多岐にわたるため、抗コリン負荷が増大することによる認知機能低下やせん妄などの中枢神経系の副作用が生じやすい。

副作用は、老年症候群(ふらつき、転倒・記憶障害・せん妄・抑うつ・食欲低下・便秘・排尿障害・尿失禁)として現れることも多く見過ごされがちである。

そこで、抗コリン作用がない非鎮静性の第2世代抗ヒスタミン薬が必要となってくる。

【効能・効果】

- アレルギー性鼻炎
- 蕁麻疹
- 皮膚疾患(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症)に伴うそう痒

【用法用量】

通常、成人にはピラスチンとして1回20mgを1日1回空腹時に経口投与する。

【特徴】

- ピラノア(ピラスチン)は、非鎮静性の第2世代抗ヒスタミン薬である。
脳内H1受容体占拠率20%以下が非鎮静性と分類され、
内服ではフェキソフェナジンとピラスチンが脳内にほぼ移行しないとされており、もっとも移行しにくいとされるのがピラスチンである。
- 日中・夜間のかゆみは、時間に関係なく効果が見られた。また年齢別では、どの年代でも変わらずに効果が見られた。
- 薬物代謝をほとんど受けないため、肝機能・腎機能に合わせた用量調整が不要である。
- 透析患者へのデータはない、また中等度から重度の腎機能障害では血漿中濃度が上昇するおそれがある。
- 機序不明は不明だが、グレープフルーツジュースと一緒に服用した場合、血中濃度の低下がみられた。
- 食事により血漿中濃度推移が影響を受けバイオアベイラビリティ(BA)が低下するため空腹時投与である。

【副作用】

重大な副作用として、ショック、アナフィラキシーがあらわれることがある。
国内臨床試験において、675例中16例(2.4%)に副作用が報告された。
主な副作用は、眠気4例(0.6%)、口渇及び頭痛が各2例(0.3%)だった。

【考察】

ビラノアは、抗コリン作用を有さず1日1回で効果が続き、代謝を受けないため用量調整の必要がなくどの世代にとっても治療に使いやすいといえる。
食事の影響を受けやすいため、初回の指導が重要である。

【質問事項】

Q.ビラノアOD錠のフレーバーは？

A.ライム風味である

Q.ビラノアOD錠の薬価・納入価は？

A.ビラノア錠と同じ価格となっている。